やくもがけ

静岡県労働者学習協会
〒424-0105
静岡市清水区
山切45-18　多田
TEL090-9121-0602

静岡県労働者学習協会
第49回総会記念講演（8月22日）
オンライン（ＺＯＯＭ）と会場（あざれあ）の併用

勤労者通信大学の基礎コースにおける

「未来社会を考える」

山田敬男氏（労働者教育協会会長・現代史家）

はじめに

今度の教科書は人間論から出発し、人類の「生存の危機」とのたたかいを強調し、人間の自由をキーワードにして未来社会論で全体をまとめている。階級の論理と人間の視点を結合して全体がまとめられている。

1　なぜ未来社会の問題が重要なのかー資本主義の限界が議論されている

①格差と貧困が深刻になっている

コロナ禍のなかで、格差と貧困が深刻になり、超富裕層がますます資産を増やし、他方で、多くの国民が深刻な生活難に陥っている。とくに女性の困窮が深刻。コロナ危機で、最前線で働く医療・福祉従事者の７割以上は女性であり、感染の不安のなかで、低賃金、過重労働のなかで、医療介護を支えている。女性労働者の約６割は非正規雇用であり、女性労働者の４割が年収２００万以下のワーキングプワー。女性労働者やひとり親家庭とその子どもたちなど“社会的弱者”が深刻な事態に追い込まれている。

②自然と人間の物質代謝の条件が壊されようとしている

人類の生存を脅かす感染症の発症は、無秩序な生態系の破壊、乱暴な開発による自然環境の破壊によって人間と動物の距離が縮まり、動物が持っているウィルスが人間に移ってきたため。また地球温暖化が深刻になっている。これは産業革命以来の温室効果ガスの大量排出の結果であるが、産業革命時と比較して、地球の平均温度は1度上がっている。現在、各国が提出している目標の合計を見ると、21世紀末に３度上がってしまうことになり、それを許せば、地球の人々の生活は破壊的なダメージ受けることになる。このように、感染症の多発、地球環境の破壊など確実に人類の生存の危機が進行している。

このような深刻な格差と貧困、地球環境の破壊がなぜ生まれているかと言えば、その根本の原因は資本主義の利潤第一主義の限りない

衝動がある。21世紀のいま、こうした格差と貧困や地球環境の問題を克服するには、利潤第一主義によって成り立つ社会＝資本主義社会の限界を乗り越える未来社会を本格的に検討することが国民的課題になっていかざるを得えない。

2　どのような視点で考えるのか

①自由と民主主義の延長・発展のなかで－「人間の自由」と「人間の解放」がキーワード

近代民主主義、現代民主主義の成果とも言える「政治的市民的自由」「民族の自由」「生存の自由」を継承する。日本国憲法をまもり、それをいかした社会づくりのたたかいは、日本の未来社会の実現にとって極めて重要なことになる。

②マルクスの未来社会への展望

『経済学批判要綱』の３段階論では、前近代社会の「人格的依存関係」←資本主義社会の「物的依存性のうえにきずかれた人格的独立性」←社会主義・共産主義の「諸個人の普遍的発展」のうえにきずかれた「自由な個性」と指摘している。

③全てのたたかいが「社会の形成要素」として受け継がれる

資本主義社会におけるたたかいの成果は、新しい社会を形づくる要素、「新しい社会の形成要素」として継承される。たとえば、大幅賃上げと全国一律最低賃金制の実現、労働時間の短縮、社会保障制度の改革、両性の平等と同権など「ルールある経済社会」をめざすたたかいは、やがて未来社会の「形成要素」として継承され、発展していく。この意味で、未来社会はいまと遠く離れた先の話ではなく、今日のたたかいは、全て未来社会に密接に関連している。

3　生産手段の社会化を中心とする社会主義的変革によってどのような社会がうまれるのか

①社会主義的変革の中心は生産手段の社会化

生産手段の社会化で一番大事なことは「生産者が主役」という原則が貫かれること。かつてのソ連のように、形だけ「国有化」しても、労働者が管理や運営から排除されていては「社会化」とは言えない。官僚層の専制支配が行われる。

②どのように社会は変化するか

生産手段の社会化によって人間による人間の搾取が廃止され、生活の向上とともに、労働時間の抜本的な短縮によって、社会の構成員が自由時間を十分に持つことが可能になり、人間の全面発達を保障する社会の土台が出来る。生産の動機や目的が根本的に変化して、利潤第一主義から解放され、人間と自然、社会の「調和ある生産力の発展」が可能になる。

＊「脱成長コミュニズム」について－

『脱成長』が良いと簡単に言えません。今問われているのは、生産力を量的に発展させることではなく、どのように発展させるかという質が問われています。人間と自然、人間と社会などとの調和ある発展をどう実現するかが問われています。そのために生産力への民主的規制と民主的計画化をどう実現するかが重要になります。今求められているのは、単なる『脱成長』ではなく民主的規制と民主的計画化にもとづく生産力の調和ある発展といえます。

＊歴史における生産力の問題ーマルクスとエンゲルスは、人間の根本的欲求である生活手段の生産が『いっさいの歴史の第一前提』とし、さらに無限の必要の拡大が生産力発展の原動力であるとしました。彼らは、生産力を資本主義という社会構成体のなかで考えており、具体的にはイギリスから始まる産業革命による生産力の発展に注目し、その生産力の発展を担いながら、その恩恵にあずからず、人間性を喪失していく労働者階級に目を向け、その現状を怒り、告発しました。彼らは、生産力の発展を重視しながら、労働者階級や民衆が生産力の成果をわがものにするかどうか、そのための社会のあり方、経済のあり方に関心を集中していました。一部で言われる生産力至上主義とはまったく無縁でした。

③未来社会の特質は

マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』のなかで、未来社会を「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような協同社会」と説明した。

「必然性の国」とは、「本来の物質的生産」に関わる時間。自分や家族、社会の生活の維持、再生産のためにどうしても必要な労働の時間。「自由の国」は、この「必然性の国」を基礎として、そのうえに成り立つ。「本来の物質的生産」を果たした後に残る時間は、人間が自由に使うことの出来る時間。こうした「自由な国」の成立は、労働時間の抜本的な短縮が根本条件。社会を構成するすべての人びとの人間的発達がそれ自体として目的とされる。それぞれの人間の精神的・肉体的能力の豊かな発展があり、その総和によって社会は飛躍的に発展する。

④旧来の定式の問題

旧来の説明では、未来社会を生産物の分配を基準に、「労働におうじてうけとる」原則が実現される「第1段階」と「必要におうじてうけとる」原則が実現される「第2段階」に区分していた。そして「第1段階」を社会主義社会、「第2段階」を共産主義社会とした。もっぱら、生産力の発展の度合いとそれにもとづく生産物の分配方式で説明した。この古い定式の理論的根拠がレーニンの『国家と革命』にあった。レーニンはこのなかで、マルクスの『ゴータ綱領批判』を根拠に、「二段階発展論」を展開した。これを引き継いだのがスターリンであり、彼は1934年に、「第1段階」の低い段階を「社会主義社会」、「第2段階」の高い段階を「共産主義社会」とよぶ用語法を発表した。さらに1936年に、ソ連社会が共産主義の第1段階、社会主義社会を実現したと宣言し、これ以降、世界の社会主義運動では、未来社会の低い段階を社会主義、高い段階を共産主義とよぶ用語法が支配的な定説となった。「二段階発展論」が1930年代以降の非人間的状況を覆い隠し、ソ連「社会主義」を美化する用語法として普及されていった。

4 ソ連崩壊は「非人間的抑圧型社会」の崩壊

1991年に崩壊したソ連は、社会主義とは無縁な「非人間的な抑圧型社会」であった。1917年にロシア革命が成功するが、1930年代に革命の大義が失われ、スターリ

ン独裁の専制社会に変質した。スターリン以後（１９５３年に死亡）のソ連は、スターリン的な個人独裁体制から共産党政治局による集団的専制体制になり、「非人間的抑圧型社会」を継続した。

５ 過渡期の持つ意味

①社会的改革－「環境と人間」をつくる

過渡期は生産手段の社会化だけでなく「環境と人間とをつくりかえる一連の歴史的過程」であり、自由な生産者の「結合」による「生産の新しい組織」が必要となる。自由な生産者が対等平等の立場で協力し合う新しい人間関係が生まれなければ「生産の新しい組織」をつくることはできない。

②政治的改革－社会主義国家と国家の死滅

“人間の自由な協同体”が生まれれば、国家を必要としない歴史的時代になり、国家の死滅が始まる。国家がなくなると、社会が混乱すると思われるが、国家に代わる強制的な権力を不要とする自治的体制に移行し、社会的ルールと自治のシステムによって、安定した豊かな社会が実現される。

６ 全ての変革が「国民の合意」によって段階的に行われる

①未来社会も国民的合意による段階的変革によって

社会主義的変革の出発点においても、その後のすべての段階で、国民多数の合意が必要である。具体的には社会主義への前進を支持する国民的合意のもとに、その国民の合意を代表する勢力が「国会の安定した勢力」を獲得する必要がある。選挙での国民多数の意思表示を抜きに、政権が勝手に社会主義に前進するようなことは絶対にあってはならない。

７ 階級的自覚と「歴史の二重の見通し」

①階級的自覚とは

労働者階級の階級的自覚とは、自分が労働者であるという自覚とともに、資本主義社会を変革し社会主義社会を実現することによって、人類の真の解放を実現するという労働者階級の歴史的使命を理解し、全国的に団結し、政治を根本的に変革しなければならないことを理解すること。

②「歴史の二重の見通し」

日本社会の変革や未来社会の展望を理解するうえで、「二重の歴史的見通し」を持つことが重要。それは、第１に、資本主義の枠のなかでの民主主義革命によって、真の「独立」と民主主義の日本をめざすという自覚である。第２に、搾取のない未来社会＝社会主義をめざすという自覚が重要である。生産手段の社会化を主な内容とする社会主義的変革によって、搾取制度を廃止し、社会から貧困をなくすとともに、労働時間を短縮し、人間的発達を保障する土台をつくり、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような協同社会」をめざすという労働者階級の歴史的使命の理解がきわめて大切である。私たちのめざす未来社会は、人間の“解放”と人間の“自由”の実現にある。

以上